

期限付きの具体的な目標設定で 学生の能力を最大限に引き出す



後藤健太氏
経済学部 准教授

関西大学 経済学部 インターファカルティ専修、国際・地域文化研究コース 後藤ゼミ

勉

強くないイメージが定着していた日本の大学生だが、近年の学生は非常にまじめだという*。

「厳しい就職環境が続くなか、自らを磨くことで道を切り開こうとする学生も多い。そうした意欲の高い学生を伸ばすためには、期限付きの具体的なゴールを示してあげることです」と経済学部准教授、後藤健太氏は語る。

後藤ゼミでは、東南アジアの経済発展・開発をテーマに研究を進める。最初にして最大のゴールは、タイにある国際労働機関（ILO）アジア太平洋地域総局に出向き、研究成果である労働・開発政策を専門スタッフの前で発表することだ。後藤氏は、2005年からの2年間、総局で開発経済専門官として途上国の産業育成プロジェクトに関与していた。その「ILO人脈」を活用している。

「インターンの採用でも優秀な大学院生しか相手にしない国連に、学部生が行って、1時間も政策提言を聞いてもらうというのは大変なこと。『本当にやる？』と学生には意思を確認しますが、3年生の夏にタイで発表するのがゼミの伝統だと思っているようです」（後藤氏）

ゼミの募集は2年生の11月、発表するテーマは12月に決まる。ゼミの開始は後期試験が終了した2月からだ。しかし、研究者としても活躍する後藤氏は、大学の長期休暇は、1次情報収集のために、“現場”である東南アジアに行ってしまう。「基礎知識となる資料は用意しま

す。学生同士で下調べをするなかで、親睦を深めることが目的です」（後藤氏）。そして、いよいよ4月から、テーマに関するILOの政策文書や専門書の輪読を始める。すべて英語で、多いものでは160ページある。「内容に不備があると、次回にやり直しです。そうなっても次回の課題は免除しないので、きちんと読み込まないと借金地獄みたいになっていきます」（後藤氏）。こうして得た知識をベースに、5月からは自分たちの提言内容を考える。多忙な国連スタッフに時間をとってもらい以上、彼らが驚くような政策の立案が求められる。「6月末の時点で60点に達しなければタイには行かない、と学生には言っています。終盤では私も手伝いますが、7月中旬には100点になりますね」（後藤氏）。その成果を東京の国連事務所で発表し、もらった意見を反映させてから英訳する。実際の台本は、後藤氏が書き直すが、A4にして15~16枚になる。それを分担して覚えて、タイでの発表に挑む。20人ほどのスタッフの前で発表を終えると、学生たちは感極まって号泣するという。

大学生がここまでやるとは驚きだが、「高い目標でも、期限までにやるべき課題が具体的であれば、誰でもできる」と後藤氏は語る。とはいえ、到達イメージを湧かせるような課題設定や、時宜を得た先生のサポートは、欠かせない要素のように思う。

後藤ゼミ

●研究内容／東南アジアの経済発展・開発問題に関する研究 ●開設／2009年 ●学生数／3年生（4期生）12人、4年生（3期生）5人 ●教育によって目指す人材像／困難な状況や嫌な役割であっても、目標を達成するためには率先して行動する人材 ●卒業後の進路／2期生までは全員一般企業に就職。「世界を舞台にプロフェッショナルとして活躍したいなら、アメリカやイギリスをはじめ、海外の専門職大学院への進学が有効で、そのためにも日本企業で1回働いたほうがいいと言っています。『将来その方向に進むことになったときは相談に乗ってください』という学生はいますね」（後藤氏）

* Benesse教育研究開発センターの調査（2008年、有効回答数4070）によると、大学生の授業への出席率は平均して87%。

2月 後藤ゼミスタート



4月の課題である英語文献。「量は多いですが、それは物理的な大変さ。単語は調べればわかるので、頑張ってこなせばいいだけです」(後藤氏)

2期生と3期生のアルバム。ゼミの活動や後藤家でのホームパーティーの写真が貼られている。その前に鎮座するカンガルーは、ゼミの守り神「ゼミ男くん」



正課の授業である本ゼミのほかに、学生たち自らサブゼミを設定し、課題に取り組む。授業の空き時間や、時には休日も返上して集まることもある。(写真は4期生)



5月



8月



8月、東京の国連事務所で成果報告終了後のひとコマ(2期生)。国連の日本人スタッフからのコメントで、最終ゴールに向けてモチベーションがあがった。



上/5月に始まった構想発表の5回目(4期生)。前回指摘された不備を改善したが、「オリジナリティがない」と先生の講評は厳しい。具体的なアドバイスをもらい、方向性が見える。
下/就職活動が終わった4年生も、発表を聞いてコメントする。全員で考えた構想のため、先輩や先生の質問には、発表者以外のメンバーも対応し、議論が白熱する。

9月



3期生(2011年)

大西慶明さん
ゼミ長

中田悠基さん

村上温子さん



大西さん●全員が同じ方向を向いて頑張るために、自分が初めて動くようにしました。メンバーに気持ちを通じないときはつらかったですが、発表終了後はすごい達成感でした。
村上さん●3期は5人だったので、発表する分量が多く大変でした。しかし、高い目標をやりとげたことは、就職活動でもアピールできる強みになりました。
中田さん●多くの時間をゼミの勉強に費やした結果、自分の問題意識が明確になりました。卒業後は途上国のインフラ整備に関わる仕事をしたいと思っています。

4期生(2012年)

山田直人さん
ゼミ長

吉村彩さん
副ゼミ長



上/発表直前、すでに覚悟を決め、余裕も見えない1期生。一方、2期では極度な緊張のため過呼吸になり、泣き出す学生もいた。
下/基本的には英訳された台本を読むのではなく、全文暗記したうえで発表に臨む。発表後の現地スタッフからの質問にも、学生が対応する(写真は1期生)。

山田さん●ゼミ以外にもいろんな活動をしている人が多いので、みんなの歩調を合わせるのには難しいです。でも、必ずタイで政策提言します。そのためにパスポートもとりました。
吉村さん●「後藤ゼミはしんどい」というのは有名でしたが、後藤先生の研究姿勢や考え方に惚れ込んでこのゼミに決めました。高い目標を掲げた以上、やるしかありません。